

【福島原発事故 その時私は】

[2011.03.16] 原子力機構副部門長 茅野政道さん (56)

SPEEDI「生みの親」 避難に使われず残念

原子力安全委員会から電話があったのは、3月16日の昼ごろ。安全委のもとでSPEEDIを活用することになったので「来てほしい」と。

茨城県東海村からタクシーと高速バスで東京に行き、その日の夜に安全委に入りました。SPEEDIの計算結果を見て、ちゃんと動いていると分かり、ほっとしました。放射能濃度の実測値を使って逆算して放出量を推定し、それを基に予測できますよと、安全委員に伝えると「じゃあ早速始めましょう」ということになった。その頃は千葉市の日本分析センターや茨城県東海村の日本原子力研究開発機構（原子力機構）でも大気中の放射能濃度のデータが取れるようになっていた。そのデータも使い、「逆推定」をやりました。

計算結果の図を初めて公表したのは3月23日。図が出来上がったのはその日の朝でした。原発から30km以上離れた所で、甲状腺被曝線量が100mSvを超えるとの予測が出て驚いた。すぐ委員に連絡し、首相官邸に報告しました。次に計算結果を発表したのは4月11日。3月23日から間が空いたが、今思えば、もう少し短い間隔で発表すればよかったかなと思います。

政府の事故調査・検証委員会は中間報告で「拡散方向などを予測でき、少なくとも避難方向の判断に有効だった」と指摘したが、その通りだと思う。SPEEDI「生みの親」とすれば避難の判断に用いられなかったのは残念です。マニュアルを読めば、放出量が分からなければ避難などの対策に使えないとなるが、緊急時はそんな話ではないでしょ。臨機応変にやらないと。